〈特集「環境と共生」2〉

環境・人間・共生

小坂国継

序

今日、地球環境の悪化の問題が焦眉の課題であることは衆目の一致するところであろう。この問題は生態系の破壊に関わる問題であるとともに、環境汚染と天然資源の枯渇に関わる問題である。また、それは南北間の経済格差に由来するとともに、それを助長させている当のものでもあり、「持続的発展」という世代間倫理に関わる切実な課題でもある。さらには、それは、その根底においては、宗教や哲学がもたらす自然観や人間観、さらには価値観と深く関わっている。したがって、地球環境の問題は、その性質上、単にある特定の領域や立場からのみ論じられるような問題でもなければ、論ずべき問題でもなく、むしろ哲学・宗教・倫理・政治・経済・生態系・科学・技術などあらゆる領域や立場からもたらされる多様な知識や情報や知恵をいかに機能的に総合・統一して根本的な解決策を見いだしていくかという問題である。そして、以下に述べるように、この問題はわれわれに従来の人間中心主義的パラダイムの転換を迫っている。また、その点で、今日、人類は真の意味でその叡智を試されているというべきであろう。

さて、ここに「環境・人間・共生」という標題をかかげた。それは、文字どおり、環境と人間との共生という意味であるが、その場合、「環境」とはいったい何であるのか、また「共生」とは何を意味しているのか、さらには「環境と人間」というときの「と」をどのように理解したらいいのかは少しも自明ではない。それで、さしあたりこの三つの言葉の意味を明確にしておく必要があるであろう。

一

通常、環境との共生という場合、われわれは自然環境や地球環境のことを念頭におきがちである。しかも、たいてい、この自然ないし地球環境は個人や社会の外にあって、個人や社会に対立して存在しているものと考えられている。しかし、おそらくそれは正しい見方とはいえないであろう。自然（地球）は個人や社会と別個の存在ではなく、むしろ個人や社会をその構成要素として包むものであり、同時にまた個人や社会の内にあるものである。自然（地球）環境は生活（社会）環境を包み、また同時に個人や社会は自然や地球環境を包んでいる。このように両者はともに包み・包まれる関係にある。われわれは自然の内に自己を見るとともに、自己の内に自然を見るのである。環境は自己の反映であると同時に自己は環境の顕現である。

だとすれば、個人と社会が健全でなければ自然は真の意味で健全ではありえないという道理になるであろう。したがってまた、今日の地球環境の急激な悪化は、とりもなおさず個人の品性や社会関係の急激な悪化のあらわれであるということにもなる。環境が病んでいるということは、それだけ個人や社会が病んでいるということでもある。それだから、地球環境の改善の問題は必然的に生活環境や社会環境の改善の問題と密接に結びついており、両者は切り離しえない関係にある。特定の個人や社会が抑圧されたり差別されたりするかぎりは、環境問題はその根本的な解決を得ることはなく、地球環境は必然的に悪化する。それだから、われわれは環境との真の共生を勝ちとるためには、まずもって差別や格差のない公正な社会、個人の基本的な権利や自由が保障されているような生活環境や社会環境を勝ちとることが先決である。この意味で、環境問題はただ単に環境問題としては解決されえない。それは同時に政治的・経済的問題であるとともに、倫理・道徳の問題でもある。地球環境や自然環境を個人的な生活環境や社会環境から切り離し、また環境と人間を相互に内含的関係にあるものとしてではなく、むしろ対立的関係にあるものとしてとらえたところに今日における地球環境問題の因由があったのではなかろうか。

二

次に「共生」という言葉の意味についても若干触れておかなければならない。通常、われわれは「共生」という言葉でもって、相利共生つまり相互に利益を享受しあっているような関係を想像しがちである。しかし、厳密にいえば、この意味での共生は自然と人間の間にはありえないといえる。というのも、自然は人間なくして存続しえるが、人間は自然なくしては存続しえないからである。そして、この意味では、もともと人間は自然に寄生的な存在であるともいえる。だとすれば、環境と人間との間にはどのよ

うな形態の共生が可能であるのであろうか。また、どのような形態の共生が望ましいのであろうか。さらには、その場合、「環境と人間」はどのような関係にあるものとして考えられなければならないであろうか。

もともと「共生」(symbiosis) という言葉は生物学の用語であって、それは異種の生物が一緒に生活している (living together) ことを指している。[1] この定義は、通常の共生概念と較べると、はるかに広義である。それは異種の生物が何らかの関係を結んで一緒に生活しているということを意味しているだけで、その関係がどのような性質のものであるかということは問われていない。したがって、一方が利益を得て、他方が不利益を被っている場合 (寄生、parasitism) も、一方が利益を得て、他方が利益も不利益も被っていない場合 (片利共生、commensalism) も、さらには双方が共に利益を得ている場合 (相利共生、mutualism) も、「一緒に生活している」という事実には変わりはない。それだから、いずれの形態も共生であるといえる。

一般に、われわれは共生という言葉でもって「相利共生」を想像しがちであるから、寄生や片利共生をも共生と呼ぶことに対しては一種のためらいを感ずる向きもあるであろう。しかし、例えば寄生関係においても、見方によっては、寄生者 (parasite, guest) が寄主 (host) に貢献しているとも考えられる。というのも、寄主は寄生者から害を被ることによって、できるだけその害を少なくしようと、あるいはその害を除去しようと努めるようになり、こうしてその生物は進化していく。だとすれば、寄生者は寄主に寄生することによって、その進化に寄与しているとも考えられるのである。

このことは捕食者 (predator) と被食者 (prey) との関係に典型的に見られるといえるだろう。というのも、被食者は捕食者から逃れようとする過程で、しだいに運動能力や集団防御能力を開発するようになり、それが被食者の進化につながって、結果的には被食者にとっても有益であるとも考えられる。また、このように被食者が進化していけば、その結果として捕食者は被食者を容易に捕食できなくなり、したがってより劣った被食者を探さなければならなくなる。そして、このような状況の変化がまた捕食者の能力の開発を、いいかえれば進化を促す。こうして被食者と捕食者は「共進化」(coevolution) していくと考えられる。[2] このことは、われわれが共生ということを考える場合、目先の近視眼的な観点からではなく、長期的な視野のもとに考えなければならないということを示している。現在におけるマイナス要因が必ずしも将来的にもマイナス要因であるとはかぎらず、また反対に現在におけるプラス要因が将来的にもプラス要因であるとはかぎらない。

このように異種の生物間における共生の形態は多様であると同時に複雑であり、双方の利益・不利益の関係も一義的ではない。

しかし、いずれにしても、生物学的な意味での共生の概念は没価値的である。そこには善悪の基準は当てはまらないし、「望ましい」とか「べきである」とかいった表現も適切ではない。それは「事実」の世界であって、「当為」や「理想」の範疇領域ではない。これに対して、われわれが環境と人間との共生ということを云々する場合、その共生の観念には明らかに価値的要素が含まれている。そこでは、環境と人間が事実としてどのような関係にあるかということが問題になっているのではなく、むしろ両者がどのような関係にあるべきであるのか、あるいはどのような関係にあるのが望ましいかということが問題になっているのである。それは「事実」の問題というよりも、より多く「当為」の問題であり、また「理想」の問題である。

しかも、上述したように、本質的に自然に寄生的な生きものである人間はいわゆる「相利共生」という形態の共生関係を保持することはできない。『聖書』においては、人間は神の「似像」(imago Dei) であり、自然の支配者であるが、自然の方から見れば、人間はまぎれもなく加害者であり、搾取者であり、「穀つぶし」である。それだから、人間の作為が加わらなければ加わらないほど、自然は良好な環境を維持することができる。そして、まさしくこの点にこの問題の核心があるといえるだろう。

では、環境と人間はどのように共生すべきなのであろうか。あるいは環境と人間との共生はどのような形態のものでなければならないか。

結論を先にいえば、筆者は、環境と人間との共生は両者が一体不二であるような共生でなければならない、と考えている。人間は本質的に自然に寄生的な存在者であるが、このような寄生的あるいは片利的な共生関係がけっして望ましいものではないということは誰もがみとめるであろう。今日における地球環境の破壊や悪化も、こうした寄生的あるいは片利的共生関係を無際限に肥大させた結果であるともいえる。人間と環境との間には、異種の生物間におけるような共進化は見られない。これまで人間は一貫して自然を開発し破壊することによって繁栄を保持してきた。この意味で、人間社会の繁栄は自然環境の破壊の代償であるともいえよう。そして、この人間による自然の破壊が自然の進化に寄与するというようなことはけっしてなかった。反対に夥しい数の生物種を絶滅させてきた。それだから、自然環境の致命的な破壊が、早晩、人間社会に壊滅的な打撃をあたえるだろうことは容易に想像される。否、すでに至るところでその徴候はあらわれているといわなければならぬ。

しかしながら、だからといって環境と人間との間に「相利共生」的関係の構築を期待することは難しい。というのも、上述したように、人間は生まれつき自然を利するように作られてはいないからである。それだから、残された道は人間が何らかの形で自己を自然と同化して、自己を自然となし自然を自己となすような

方途を見いだすことであろう。そしてそれが、筆者が「一体不二的共生」と呼んでいるものである。それは、人間が唯一、意識をもつ存在であり、したがってまた自己意識や自覚を有する存在であるという事実によって、その実現が可能的であるような共生的関係である。より正確にいえば、意識的存在である人間が従来の自己中心的な意識を百八十度転換することによってはじめて可能となるような共生的関係である。それはいわば意識の意識自身による自己変革であり、本来、意識的存在である人間がなしうる唯一の自然との共生方法である。パスカル流にいうならば、意識をもつという点に人間の悲惨があるが、同時にまたまさしく意識をもつという点に人間の偉大さがある。そして、この人間的本質を悲惨から偉大さへ転換すること、これが人類に与えられた課題であり使命であるといわなければならない。

三

さて、われわれは自然と人間との間の自他不二的な共生的関係のモデルをネス（Arne Naess）の「自己実現」の観念と西田幾多郎の「行為的直観」の観念にもとめることができるであろう。デカルトによる「自我」（ego）の原理の確立以来、われわれは自己を自然の外にあって、外から自然を客観的に認識し、またそれによって自然を支配し統御するものと考えてきた。そこでは、自然は常にわれわれの外に、われわれに対立してあるような存在と考えられてきた。しかし、むしろ自然はわれわれの内にあって、われわれと一体不二であるようなものではないだろうか。あるいはどこまでもわれわれを包み、われわれを育むものであるのではないだろうか。もしそうだとすれば、ネスのいうように、われわれは自己を自然と同一化すればするほどますます自己を実現することができるであろうし、また西田のいうように、真の実践というものは、われわれが物となりきって「物となって見、物となって行う」ところにあるといえるだろう。そしてそれはレオポルド（Aldo Leopold）のいう「山の身になって考える」（thinking like a mountain）[3] 精神とも合致している。

ネスは論文「シャロー・エコロジー運動と長期的展望に立ったディープ・エコロジー運動」（The Shallow and the Deep, Long-Range Echological Movement, 1973）のなかで、文字どおり、エコロジー運動を浅いタイプのものと深いタイプのものとに分けた。[4] シャロー・エコロジーというのは、環境悪化の問題をただ環境の汚染と資源の枯渇の問題としてのみとらえ、諸々の制度の改革や規約の制定によって、この問題を技術的に解決しようとするものである。そこでは、主として先進国の人々の健康と物質的な豊かさの維持・向上に運動の目的が置かれている。つまり現在、自分が享受している豊かな生活水準を維持し向上させるには、現実の環境悪化の諸現象に対してどのように対処し、どのように行動すればよいかが、その発想の原点になっている。

これに対して、ディープ・エコロジーとは、環境悪化の問題を単なる技術的に解決可能な問題とは考えず、それをもっと深くもっと根本的な観点から考察していこうとするものであり、概してこの運動は自然と人間との関係において、われわれの意識の変革をもとめている。より具体的にいえば、ディープ・エコロジーは、自然をもっぱら人間の搾取の対象として見るような、従来の人間中心的な自然観に代わって、人間をその単なる一構成員とするような生態系中心的な自然観を構築すべきだと考えている。したがって、この点では、ディープ・エコロジーはレオポルドのいわゆる「土地倫理」(land ethic) の精神を受け継ぐものであるといっていいであろう。レオポルドは土地（今日でいう環境）を人間の利用や支配の対象としてではなく、むしろ愛や尊敬の対象として見ることをもとめた。[5]

ところで、ネスは自己のディープ・エコロジーを展開するに当たって、彼の考え方の基本として「自己実現」(self-realization) の観念を強調している。[6] ネスの考えでは、人間というものは一般に自分がもっている可能性を過小評価している。通常、われわれは偏狭で利己的な「自我」(ego) を「自己」(self) だと思っている。しかし、人間はバランスよく成長すれば、自分を無限に拡大し、あらゆる存在と自分を同一視するようになる。いいかえれば、人間は自己を実現するのであり、この自己実現が進むにつれて、生のよろこびや意味も深まっていくのである。ネスによれば、生態学的な観点から見た場合、自己とは、その人が同一化した当のものである。では、その同一化は何によって生ずるのか。それは「共感」(sympathy) によってである。すると自己は他のものに共感すればするほど、自己を拡大していくということになる。自己は個体性の殻を突き破って、無限に自己を拡大する可能性をもったものである。そして、それは人間が意識をもった存在であるということ、したがってまた自覚的な存在であるということに由来している。

自己実現 (self-realization) を誤って自我実現 (ego-realization) つまり利己的な欲求実現と考えるとき、自己がもっている可能性を不当に過小評価して、自己をあまりに狭い領域に閉じ込めてしまう。いわゆるラッシュ (Christopher Lasch) のいう「ミニマル・セルフ」(minimal self)[7] である。反対に、それを本来的自己の自己実現 (Self-realization) ととらえるとき、自己は無限に拡大され、環境全体と一体化することができる。いいかえれば、環境全体が自己の身体となるのである。自己が身体という障壁を超越するということはいわゆる身体がなくなるということであり、環境が身体となるということである。自己が拡大するにしたがって身体も拡大していく。こうして自己はいわゆる個体という通念とそれへの執着から解放される。そしてそこに生の深い意味と喜びがあるのである。生の表層において対立し相克しあっているものが、生の深層においては相互に一体となり相和し

ているのである。われわれの最大の誤謬は、われわれが日常体験する表層の主我的世界を唯一実在の世界だと思いこみ、その深層の無我的世界に対して頑なに目を閉ざしてしまっていることである。

では、どうすればわれわれは一切のものと自他不二の立場に立つことができるであろうか。これに対しては、ネスは、前述したように、自己を無限に拡大して自己実現を遂げることによって、と答える。自己を一切のものと同一視することによって自己を自然や環境全体へと拡大し、その究極において自己がすべての生命を自己の内に包み込み、かくして自他不二の立場に立つことができるのだという。人間はしばしば自分の地位や財産や家を自分と同一視するように、自分が愛する川や海や山を自分と同一視し、その究極において自然や環境全体と自己を同一視することが可能である。

自己（self）は単なる身体（body）でもなければ、精神（mind）でもなく、また自我（ego）でもない。おそらくそれらの根底にある、もっと深遠で普遍的なものである。むしろ身体や精神や自我がこの自己に境界を設けて、自己というものを不当に浅く狭いものにしている。というのも、自己と他者、我と汝を隔てさせているのは、まさしく身体という存在であり、霊魂（心）という存在であり、また自我の意識にほかならないからである。われわれは自分の身体を境にして他者と隔てられており、自分の心や自我意識を境として他者と隔てられている。いわば身体や霊魂や自我意識が他者との交流の障壁になっているのである。もし実体としての身体や霊魂や自我という存在はまったくの幻影であるということを自覚すれば、もはや自己を他者から隔てる障壁はなくなり、自己は自分を他者と一体化させることができるであろう。そして他者と一体化したこの自己こそ本来の自己（Self）なのである。通常、われわれは自己の外に環境があり、自己と環境は対立していると考えている。しかし、実際は自己が環境であり、環境が自己であるのである。環境は自己の根底であり、自己は環境の顕現である、一表現点である。

このようにネスは他者と共感することによって自己を他者と同一視し、無限に自己を拡大していくことができると考えている。これが彼のいう自己実現の観念である。しかし、真の自他不二の立場は自己を対象的に拡大していく方向にではなく、むしろ自己を自己の底に否定し突き抜けていく方向において成就されるのではなかろうか。いいかえれば、真の自他不二の立場はどこまでも自己を実現していく方向においてではなく、むしろ反対に徹底して自己というものが消失していく方向において到達されるのではなかろうか。というのも、ネスの考え方にはまだ自己を主とし、自己の内に他者を包み込もうとする自己中心的で主観主義的な思考様式が見られるのに対して、後者においては自己というものが完全に自己の底に消失しきっており、端的に自己が他者の内に包

み込まれている。前者においてはなお二元論の残滓が見られるが、後者においては一切の二元論的な対立が消失している。

しかるに、自己が消滅するということは（自己に対する）他者も消滅するということであるから、そこでは一切が他者であるともいえれば、一切が自己であるともいえる。それが真の意味での自他不二の立場であるといえるだろう。そしてこのような境位においてはじめて、「張公酒を喫すれば李公酔う」ということがいわれうるのである。

ネスの自己実現の思想は、いわば自己が自己の内に世界全体を包み込もうとするものであるとすれば[8]、筆者のいう宗教的自覚は、反対に自己が世界の内に自己を喪失する立場であるといっていいかもしれない。前者においては、自己はどこまでも自己自身を肯定し拡大しようとするが、後者においては、自己はどこまでも自己を否定し無になりきろうとする。そしてそのように自己が自己を否定して無になりきったところに、かえって真の自己が見られると考えるのである。自己がなくなるということは、自己に対立するものもなくなるということである。だとすれば、一切が自己であり、世界が自己であるということになるであろう。この意味で、自己を否定するということは自己を肯定するということにほかならない。自己が自己を喪失するということは自己が自己を実現することである。そしてわれわれはこのような考え方の典型を、例えば西田哲学の「行為的直観」の思想に見ることができるであろう。

「行為的直観」は、行為と直観との間の相即的・相補的な関係をあらわす思想である。物を直観するということは、その物に働きかけるということ、すなわち行為するということであり、反対に働くということは自己自身を直観するということである。つまり見ることは働くことであり、働くことは見ることである。われわれは直観することによって行為し、また行為することによって直観する。このことはポイエシス（芸術的制作）を例にとれば、一目瞭然であろう[9]。

では、このような直観即行為・行為即直観の立場はいかにして可能であろうか。おそらく、それはわれわれが自己（いわゆる自我）を喪失して物自身になり、「物となって見、物となって行う」ときにのみ可能であろう。それは自己の側から自己に即して物を見るのではなく、反対に物の側から物に即して物を見ていこうとする態度であるといえる。いままで自己の側から見ていたものが、当の見る自己がなくなることによって、逆に物の側から照らされるのである。そのことを西田は「物の中に入っていって物の中から物を見る[10]」とか、「物によって心を照らす[11]」とか「物来って我を照らす[12]」とか表現している。それらはいずれも自己の底に自己を突破した立場をいいあらわしたものである。同じく自己実現といっても、自己を無限に拡大していく方向と、反対に自己を無限に喪失していく方向とが考えられる。ネスのエコソフィーT[13]は前

者であり、西田の行為的直観の思想は後者である。そして、そこに東西の思惟様式の差異が端的にあらわれているといえるかもしれない。

いずれにしても、環境との共生ということを考える場合、われわれは自己を狭い自我や身体に限局することなく、反対に自己をどこまでも解放していく必要がある。それは自己を深化させることであり、自己を拡大することであり、自己を実現することである。こうしてわれわれは自己と他者が一体不二であることを自覚し、あらゆるものの内に自己を見るようになる。そこにあるのはもはや（自他対立の）他動詞の世界ではなく、（自他不二の）自動詞の世界である。そこでは、一切が自己であると同時に一切が環境である。ここに社会や自然の環境との真の共生というものがあるのではなかろうか。

現在、われわれに要求されているのは、われわれの意識の変革であろう。上述したように、われわれは意識をもつということにおいて他の一切の被造物と根本的に異なっているが、またそれがわれわれをして他のものとの間に障壁を設けたり、境界を設けたりする原因ともなっている。自己を意識するということは他者と異なったものとして自己を意識するということであり、したがって自己を他者と区別するということである。こうしてわれわれは意識をもつことによって自己と他者、内と外を区別するようになる。そしていわゆる二元的対立の世界を思惟によって仮定された世界ではなく、現にあるがままの事実の世界であると考えるようになる。

しかし、このような前提においては人間と自然や環境との真の共生はありえない。人間と環境とを区別し、その上で両者の共生を考えることは不可能であり、このような試みは成功しない。このことをわれわれは深く銘記する必要がある。けれども、われわれは自然における唯一の意識的存在であり、自覚的存在であるという同一の事実によって、ふたたび自然や環境との間のこのような障壁や境界を取り去り、自他不二的な立場に立つことができるのではなかろうか。というのももともとこのような境界は人為的に設定されたものであるから、それを移動させたり除去したりすることは可能でなければならない。そして、そこに意識の弁証法的発展というものがあるようにも思われる。環境との自然的で直接的な統一の段階から、意識的分裂の段階をへて、自覚的統一の段階へと進化していく。この意味で、今、われわれに求められているのはわれわれ自身の意識の「コペルニクス転回」(kopernikanische Wendung) であるといえるであろう。

（1）『岩波生物学辞典』第三版、一九六〇年、二八七ページ。
（2）桑原康『共生の生態学』岩波書店、一九九八年、二四―三二ページ、参照。

(3) Aldo Leopold, *A Sand County Almanac*, 1949. 新島義昭訳『野生の歌が聞える』講談社学術文庫、二〇四ページ。

(4) Arne Naess, "The Shallow and the Deep, Long-Range Ecological Movement", in *Environmental Ethics*, ed. Lous P. Pojman, 2001, pp.147-149.

(5) Aldo Leopold, "The Land Ethic", in *Environmental Ethics*, ed. Andrew Light & Holmes Rolston III, 2003, pp.38-46.

(6) Arne Naess, "Self-Realization: An Ecological Approach to Being in the World", in *The Trumpeter* 4, 1987.

(7) Christopher Lasch, *The Minimal Self: Psychic Survival in Troubled Times*, 1984, p.16.

(8) ネスはしばしば「包み込む自己」(comprising self) ということをいう。

(9) 西田の「行為的直観」については、拙著『西田幾多郎』〝ネルヴァ書房、一九九五年、六九―一一五頁、参照。

(10) 『西田幾多郎全集』第十二巻、三八〇ページ。

(11) 同全集、第十巻、四二二ページ。

(12) 同巻、四二七ページ。

(13) ネスの環境哲学を表示する言葉。エコソフィーはエコロジー(生態学)とフィロソフィー(哲学)を結合したネスの造語であり、Tは彼の山小屋の名称Tvergasteinの頭文字。なお、エコソフィTについては、Arne Naess, "Ecosophy T: Deep Versus Shallow Ecology", 1985, in *Environmental Ethics*, ed. Lous P. Pojman, 2001, pp.150-157. および *Ecology, Community and Lifestyle*, 1989, pp.163-212. を参照。

(こさか・くにつぐ、哲学、日本大学教授)